

# <書評>

Ch・リンドホルム，森下伸他 訳

『カリスマ——出会いのエロティシズム——』（新曜社）

沼田健哉

当書の著者，チャールズ・リンドホルムは，ハーバード大学人類学・社会科学部の助教授であり，これまでに「恋人と指導者」「感情抑制の社会人類学」「恋愛の社会人類学」などの著書がある。筆者が，当書を書評しようと思ったのは，カリスマが筆者にとってきわめて大きな研究課題であることと，リンドホルムが，筆者と同世代の研究者であることとの二つの理由による。

結論をいうと，筆者は，当書に高い評価を与えることができないし，リンドホルムの研究能力を高くみなすこともできない。しかし，まったくだめかというところでもなく，種々の点で努力をするならば，今後一層の業績をあげることのできる人物ではある。

それらについては，以下順次述べることにするが，まず当書の内容の紹介をすることにしたい。当書は，4部，12章より構成されている。

第Ⅰ部序説は，第1章序説のみにより構成されており，当書を書くにいたった契機と内容の紹介をしている。

第Ⅱ部理論編は，第2章「あるがままの人間」——情念の社会理論——，第3章非合理的ものの社会学——マックス・ウェーバーとエミール・デュルケム——，第4章催眠と群集心理学——メスマー，ル・ボン，タルトー——，第5章エディプスとナルシス——フロイトの群集心理学——，第6章カリスマは精神の病か，それとも再社会化か——，第7章カリスマの総合理論からなっている。

第Ⅲ部実例編は、第8章「取り憑かれた従者」——アドルフ・ヒトラーとナチ党——第9章「愛こそわが裁き」——チャールズ・マンソンとそのファミリー——第10章「あなたが知る唯一の神」——ジム・ジョーンズと人民寺院——第11章「聖なるものの技術者」——シャーマンと社会」から成っている。

第Ⅳ部結論は、第12章今日のカリスマのみによって構成されている。

以上からも分かるように、当書の特徴の一つとしては、カリスマを扱った本であるにもかかわらず、ウェーバーの比重が相対的に低いことがあげられる。それは、それでよいであろうが、問題なのは、リンドホルムのウェーバー理解のレベルが、きわめて低いことがあげられる。

その程度は、たとえば、島藺進東大助教授の「カリスマの変容と至高者神話——初期新宗教の発生過程を手がかりとして——」（中牧弘光編『神々の相克——文化接触と土着主義——』新泉社、と比べると、比較にならない程低い。しかし、これは、元来、二人の研究者としての能力が、違うのであるから、ある意味ではしかたのないことである。

さらに、リンドホルムのレベルは、島藺以外の研究者である、大村英昭大阪大学教授の「スティグマとカリスマ——『異端の社会学』を考えるために——』（『現代社会学2』講談社）と比較しても低いのである。

大村の論文は、外国の学説を紹介しているだけであるから、やや退屈なものであるが、少なくともその理解は、正確である。そして、日本には、ウェーバーや、デュルケーム、マートンのように、新たな理論を形成できる理論家は、皆無であるから、大村のみを責めることは、できない。

しかるに、リンドホルムのウェーバー解釈は、いたるところで誤っているのであるから問題外である。彼の、ウェーバー理解のレベルは、筆者が学部時代に在籍した、折原浩ゼミの学部学生のレベルよりは、明らかに低い。

たとえば、リンドホルムは、ウェーバーの真性のカリスマと、それ以外のカリスマの差異を理解していないというよりは、誤まって展開している。こ

れに対し、大村英昭は、きわめて正確に理解しているだけでも、りっぱである。

さらに、リンドホルムは、デュルケーム、ル・ボン、タルド、フロイトらの論を、カリスマ論として展開しているが、これらは、ウェーバーの論とは差異があり、彼のような強引な同一視は、学問の進歩をもたらすものではないといえよう。

リンドホルムは、その実例編において、ヒットラーや、アメリカの異常性の強い二つのカルトを取り上げていることから察せられるように、カリスマを、異常な現象、社会にとっては好ましからぬものとみなす傾向が強い。さらに、シャーマンを、未開社会の現象としてとらえている。

このような視点からは、近現代日本の、シャーマンであり、かつ真性のカリスマである、天理教の中山みき、出口ナオ、北村サヨ、高橋信次らを、把握することは、まったくできないということができよう。勉強不足もいかげんにしろといいたいくなるのは、おそらく筆者のみではないであろう。

彼は西欧のキリスト教社会の視角から、抜け出すことができないままでいるのである。しかし、リンドホルムは、人類学者なのであり、文化の相対化というものが、人類学の前提なのであるから、人類学者としての資格を欠いているということができよう。

彼は、キリスト教文化圏における、カルトに対する一般人の見解を抜けていない。これは、他の研究、例えば、“STRANGE GODS” (Beacon Press, Boston 1981) より、低レベルであるし、Joan M. Lewis, Ecstatic Religion: An Anthropological Study of Spirit Possession and Shamanism (1971) とは、比較にならない。リンドホルムと、ルイスではまったく研究者としての才能が異なっているのである。ルイスは、1971年という時点において、キリスト教をも、相対化した、シャーマニズム論を展開して、おり、その研究者としてのレベルは、筆者や島藺の遠く及ぶことのできない高い位置にある。しかるに、リンドホルムの当書は、1990年に書かれ

ているのであるから、比較にならない。

また、ロマンティックな二人関係と、カリスマの類似性を指摘しているが、これは、ほとんど意味がない。リンドホルムは、恋愛における人間関係をその研究のメインテーマとしているが、だからといって、カリスマの宗教的側面と、恋人同志のエクスタシー的合一との類似点を指摘するのみでなく、その本質的な差異にも、もっと目を向けるべきである。

しかしながら、なかなか面白い指摘もあり、当書は、いちがいに否定的にばかりみることとはできない。たとえば、以下の部分は注目してよい。「だが、ウェーバーが考えたようにカリスマは合理化によって消滅させられるのではなく、カリスマ的啓示は合理化によってますます歪められ狂心的になってきている。今日におけるカリスマの過剰なあらわれは、交感をもとめる人間の根源的な欲求を社会システムが満たしえないでいることの反映である。」

ウェーバーは、カリスマは合理化によって消滅するなどとはしていないから、その意味においては、理解が不正確ともいえるが、ウェーバーが示唆したことを明確にいつているととるならば評価すべきであるといえよう。少なくとも、Bryan R. Wilson, *The Noble Savages: The Primitive Origins of Charisma and Its Contemporary Survival*, University of California Press, 1975 における、「現代の社会にカリスマが残存しているというのは疑問である。」さらには、カリスマは、「先進産業社会の発展につれて、急速に衰微してきたように私には思われる。」という主張よりは、ましである。

ウィルソンは、現代先進工業社会をヨーロッパだけに限定して考えているのではないか。少なくとも、アメリカ合衆国や日本の現状は、宗教やカリスマの衰退という傾向をかならずしも示していない。それどころか、これらの世界は、宗教の時代、宗教復興の時代ともいわれているのである。

現代日本に限定しても、注目すべきカリスマの持ち主は、数多く輩出しており、衰退しているとはいいいきれない。ウィルソンは、「何かカリスマに近

似するものが発生するといっても、せいぜい周縁的に、間隙的に生じるのであって、革新や変革の動的としてよりも、むしろほとんど余暇的なレクリエーション活動として生じるにすぎない。カリスマは今や面白いからにすぎない。したがって、その観客は追従者であるよりも、むしろファンであるといっている。

しかし、たとえば、日本の新宗教においては、信者の教祖に対するスター崇拝が、教祖のカリスマ性をより強化するという例が、大山祇命神示教会やコスモメイトにおいてみられる。したがって、スター崇拝は、カリスマの衰退の証拠というよりは、カリスマの現代的展開の一形態として捉えた方がよい場合が少なからずある。よって、ウィルソンのような単純な分析視角では、現代宗教を理解することは不可能なのであり、その点からみるならば、リンドホルムは、ましだといえよう。

さらに、最後の以下の指摘も興味深い。「ウェーバーやデュルケムによって確立され、心理学的な理論によって異なった表現をあたえられたパラダイムが主張しているのは、実のところ他者の深い情動喚起的な交感、理性ではなく生きられた生命力をもたらす交感をその基礎としているということであった。人間を充電するこうした境界の超出がなければ、もはや生はその醍醐味をそこない、行動は力を欠き、世界は色彩をうしなって単調さのうちに沈むであろう。だから問題なのは、このような無我と交感というモーメントが今後も存続しつづけるかどうかではない。それはわれわれ人間の不可欠な条件の一部である。問題なのは、そうしたモーメントがどのような形態をとるかということなのである。」

思うに、当書は、純粹の学術的研究とは見なすべきものではなく、教養課程の学生に、マックス・ウェーバー、エミール・デュルケム、ル・ボン、タルド、フロイトらの学説を教え、その適用例を、ヒトラーや、カルトの集団に適用することにより示し、教えるために作られたものであるかもしれない。それならば、それなりに面白く読めるが、しかし、諸説の理解があまり正確

でなく、リンドホルム特有のひねった解釈に基づいているのは、やはり問題である。それに、社会心理学の成果といって、ル・ボンや、タルドをあげているが、Le Bon, G. *Psychologie des foules* が1895年に書かれ、Tar de, G. *Lopinion et la foule* が、1901年に書かれ、その後、群集心理学には、多くの研究蓄積があることを考慮すると、もっと、しっかり勉強するべきであろう。

筆者は、恋愛における人間関係が専門の研究テーマであり、カリスマは、初めての研究課題のようである。当書は、ウェーバーのような恐るべき天才の提示した概念を、リンドホルムのような凡庸な才能の素人が研究の対象とすると、このような本を書くことという点で教訓的であった。

筆者が、リンドホルムに望みたいのは、ぜひ日本に留学して、日本の現在の民俗信仰や新宗教の諸形態を学習することである。そうすれば、リンドホルムも、かくのごとき本を書いて、読者の時間の浪費をさせることもなく、彼自身の研究レベルも一層向上するであろう。リンドホルム氏の一層の研さんを望んで筆者のつたない書評を終えることにする。